

環境、その身体性と地域性のリアリティ

——『環境の社会学』に寄せて

関 礼 子

危機と道徳の環境イメージ

環境は堅苦しいテーマだと感じる学生は意外に多い。「説教くさい」気がするという。なるほど、環境という問題は危機によって語られ、道徳律によって各人に自省を迫るという風潮がある。だからこそ、学生は環境を学ぶ以前に「環境問題は放置できないから、ひとりひとりの心がけが重要なのだ」という結論を出したがる。「ひとりひとりの心がけ」論への無力感を感じる場合は、「国や企業、NPOが問題解

決に努力すべきだ」と他人任せになる。

小学校から環境問題を勉強してきたという「満腹感」に加え、マスコミを通して伝えられる環境危機への慣れもあるようだ。ある報道カメラマンが、必死で撮影した戦地の映像もすぐに情報として消費されてしまうと嘆いていたが、環境の危機も同じである。危機が叫ばれても、どのように危機を回避するかという点は括弧に括られたまま、次々と消費されていく。

あれほど騒がれたダイオキシン問題

なんと四〇四〇件ヒットした。

「環境にやさしい」や「エコ」から生まれるイメージは、「ロハス」や「スローライフ」といった新しいライフスタイルを提案しながら、市場のニッチを切り開いてきた。それらは、短期的にみれば、私たちをさらなる消費行動へと駆り立てる免罪符のように機能することもあるが、長期的に環境問題の解決に資するしくみを育てるのなら、それも良しである。

だが、「やさしさ」は時に残酷である。表面をなでるような「やさしさ」を盾にしながら、皮肉な結果が次々と生みだされていく怖さがある。脱原発の動向を牽引してきたのは、事故発生時の人体と環境への放射能汚染リスクを懸念してきた反原発運動だった。この動きを温暖化ガス削減という命題が覆し、「原発はエコ」という言説を肥大化させつつある。温暖化を食い止めるために、廃棄物問題や重大事故のり

スク（近年であれば原発テロのリスクも含まれるだろう）を引き受けるという究極の選択が、現実味を帯びた口調で囁かれはじめている。

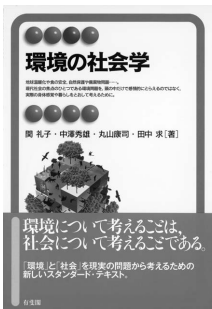
環境を考えることは社会を考えること

いったい環境とは何か。環境の何が問題なのか。どのように問題解決の糸口をつかめば良いのか。

『環境の社会学』を編むにあたり、筆者らは、環境の身体性と場所性を重視し、現実の環境問題が孕んでいる痛みや苦悩を議論の出発点に位置づけた。環境や環境問題は、客観的である以上に主観的に構成されるものであるし、何よりも抽象的ではなく具体的に存在しているからである。

環境問題のローカルな現場では、環境破壊は人間破壊であり、共同体や地域の破壊だと捉えられてきた。水俣病をはじめとする公害問題は、身体や生

いまや環境を抜きに経済も社会も語れないくらい、環境は重要なキーワードだ。環境にやさしい技術、環境にやさしい暮らし、環境にやさしいエネルギー、環境にやさしい行動など、環境への「やさしさ」が巷にあふれている。「エコ」という語感も「やさしさ」を想起させる。エコラベル、エコポイント、エコバッグ、エコビジネスなど、聞いて心地よく口当たり良い「エコ」が氾濫する社会だ。試みに、朝日新聞のデータベースをキーワード検索すると、二〇〇九年の一年間に「環境にやさしい」は一六〇件、「エコ」は



関 礼子・中澤秀雄・丸山康司・田中 求 [著]
『環境の社会学』
四六判, 284頁, 1995円(税込)

命に不可逆のダメージを与えるのみならず、地域の人と人とのつながりに深刻な影響を与えてきた。開発に抗議する自然環境保護の運動のなかで、運動の担い手は、自らのアイデンティティを形づくる風景や地域の記憶を刻み込んだシンボリックな環境が失われる精神的苦痛を訴えた。

環境には、人と自然との関係性や自然を介した人と人の関係性が、網の目のように張り巡らされている。人は自然に働きかけ、その行為が過剰であるという環境からの応答があれば、行為を柔軟に微修正しながら安定した関係性を結ぼうとしてきた。その最適解が風土や文化というかたちをとり、多様な生の豊かさを支える環境を育んできた。

環境問題はそうした生のあり方が否定されていくことの問題であり、平穩無事に暮らすという「ささやかな幸せ」を暴力的に奪っていくことの問題

であった。私たちが望んでいる「この環境で生きる」ことが許されない社会とは何か。現場から立ち上ってきた思想、たとえば環境権の思想は、私たちが幸福に生きるために、生活を取り巻く環境を地域ごとを選び求めることが「当たり前」の社会を求めてきた。環境について考えることは、社会について考えることであった。

「試行錯誤」で地域をつくる

画一的な開発に頼らず（頼れず）、地域独自の発展を模索してきた地域がある。

地域独自の風景や集落のたたずまいを生かした地域再生、過疎地域での伝統的な生業の再生や新しい共同性構築への試み、水俣市の「もやい直し」をはじめとする公害経験地域の環境再生の動向など、優れた環境創造の事例として注目されてきたのは、たいていローカルに根ざした事例だ。

そこには、「環境を守る」だけではない、多様な価値や生き方、楽しみや生きがい、地域の誇りやアイデンティティの創出につながる、さまざまな「試行錯誤」（宮内泰介）があった。これら事例のなかで、歴史や伝統は切り離された過去ではない。「試行錯誤」

のためのローカルな知の源泉である。

「試行錯誤」が可能になるのは、その場、その状況に応じた柔軟な対応が、後戻りのできない結果を引き起こさない限りである。巨大で強力な技術は「万が一」を想定しないで環境を画一的に管理する発想だから、ひとたび問題が発生するとお手上げになる。原子力エネルギー技術、ダムやスーパー堤防のような災害封じ込めの技術はその代表例だ。社会は問題を制御しきれない事態に直面する。

巨大で強力な技術は、もとより地域固有の文脈で扱うには手に余る。ローカルな現場から環境を考える場合に

かなったものである。

は、むしろ、微調整が可能で、小回りがきく適正規模の技術のほうが優位である。しかも、「試行錯誤」のための創意工夫を続ける楽しみがある。市民風車を回すことで地域の観光や産業を元気にするしくみをつくったり、地域の既存産業をつないで地域密着型のバイオマス事業を展開したりと、生き生きとした想像力を自在に開いていく喜びがある。

最適解を導き出すために

筆者らが注目したのは、こうした楽しみや喜びをもたらす「コンヴィヴィアルな技術」（イリイチ）である。制御不能な大規模技術ではなく、地域が地域のための道具としてコンヴィヴィアルな技術を選び取ることができる社会は、地域、市民（住民）、自治体が、汚染規制や景観づくりなど環境をめぐる諸問題に対して、国に先立って処方箋を書いてきた経緯からみても、理に

ローカルな現場では、「人間か自然か」といった単純な二項対立は役に立たない。実際の人間と自然とのかわりには多様で複雑であるし、幸せに生きるためには「人間も自然も」必要である。二者択一の選択ではなく、多様な意見を持つ人びとがとりあえず納得して折り合えるような、柔軟なしくみが求められる。必ずしも環境の持続可能性を目的にする必要はない。結果として環境に負荷がかかりにくいしくみであれば良い。

柔軟にさじ加減を調節し、いい塩梅でしくみをつくるには、現場からの視点が重要だ。それは、さまざまな個々の実践から、大きな設計を問いなおすことでもある。具体的な林檎からリンゴという概念を得ることはできるが、リンゴという概念のみでは具体的な林檎を理解することはできない。同様に、環境とは何であるか、環境問題は

どのような問題であるかを具体的な現場から考えることなしには、環境問題の解決に結びつくしくみを導き出せない。さらに、解決といわれるものも概して一面的なものであることは、水俣病の例で繰り返し語られてきたとおりである。だからこそ私たちは、それぞれの問題のそれぞれの最適解を導き出すために「試行錯誤」し続けるのである。

『環境の社会学』が目指したのは、危機に訴えて道徳と啓蒙で解決を促そうとする「環境言説」を疑うことだった。環境を具体的な身体と場所からリアルに考え、環境と社会との関連を問いなおすことであった。『環境の社会学』では、具体的な事例に寄り添うことで、もつれた環境問題を編みなおしていくヒントを示すことができたのではないかと考えている。

（せき・れいこ 立教大学社会学部教授）